

きたのかい？」

私は、スバリと切りだしました。

こんなことを言ったりできるのが、おじさんという中間的存在のいいところですよ。親だと、こうはいかないでしょう。

だから、彼女が、親にはわかってもらえそうもない、モヤモヤとした気持ち、わかってもらいたくて、おじさんのところへやってきた気持ちも、わかるのです。

恋人でも、できたのかい？」

私がそういうと、彼女は、返事のかわりに、

「いやなおじさん」

といって、私をにらまねをしました。

が、それが、どうやら凶星らしいことは、彼女の耳のあたりが、ポツと赤くなったことでもわかります。

それからしばらく、万知子は、ふんぎりわるくモジモジしていました、

「ねえ、おじさん」

と、いつ、職場恋愛の一般論のようなものについて、私の意見をききたそうとします。

——とうとう来たな——

私は、心の中で、緊張しました。

彼女は、一般論に借りて話をしてはいるのですが、そのじつ「自分たち」のことについて、いろいろと私にきいてもらい、私の意見もきこうとしているのです。

私のおそれていたことが、とうとうやってきたのです。

私は、スラックスの下でもり上がっている万知子の肉線が、なやま

しく目に映りました。

——チキンショウ、どこの馬の骨かわからないやつに、ムザムザ万知子をやってたまるものか——と思いました。うわべは「ふん、ふん」といって、彼女の話を傾けているようによそおっていましたが、腹の中では、いよいよ決行のときがきた、という思いが、ムラムラとたかぶっていたのです。

このとき、私は、一つの詐計を思いつきました。

それは、いまずぐ役に立つ方法ではありませんでしたが、近いうちに役に立つはずでした。

私は、内心を押し隠し、ものわりのいいおじさんの顔になると、いろいろと彼女から話を引きだし、どうやら彼女に「おつきあいしている人」があるらしいことを、つきとめたのです。

そこで、私は、彼女に一つの提案をしたのです。

「そりゃあ、彼氏のひとりやふたりつくるのはいいんだけど……でも職場関係は、やめといたほうがいいんじゃないかな。周囲がうるさいし、それに、いざっていうとき、ひっこみつかないからね」

じつは、このとき、私の頭には、あるひとりの若者のことが、浮かんでいたのです。

それは、すばらしい若者でした。

現代の若い女性に好かれそうな、あらゆる条件を備えているのです。そして、現実には彼は、その条件を利用して、女でいりに、年に似合わない（年に相応した、というべきかも知れませんが）すご腕を發揮していました。

ところが、この青年は、私の学校の後輩で、仕事のことなんかで目をかけてやっているせいもあって、私のいうことなら、どんなことで

もきくのです。

——そうだ。あいつを使ってやろう——

と、私は思いました。

彼のような絶好のタレントがいたことが、私の詐計を、とても有利にしたのです。

万知子は、私の情理をつくしたお説教が、すくなくらず身にしみたようでした。

そんな彼女の様子を見て、私は、いつてやったのです。

「ハハ、なにも、男の子とアソんじゃいけない、といっているわけじゃないんだ。ただ、職場の関係は、気をつけなきゃいけない、といっているだけなんだよ」

それから、

「ボーイ・フレンドがほしいんだったらね、ぼくが紹介してやってもいいんだぜ。いいやつを知ってるからね」

そんな冗談めかしたはなしが、トントンと発展して、それでは、近いうちに、いいボーイ・フレンドを紹介しよう、ということになったのです。

これが、私の詐計の第一段でした。

次の土曜日、私は、やっと、万知子を、ある場所で、彼にひきあわしたのです。

万知子は、ひと目で、彼にイカれたようでした。相当な女の子でさえ、いままで彼にはあっさりイカれているのですから、万知子のような、いわば、まだ、男というものに耐性のできていない女の子が、イチコロになってしまったのも、無理はありません。

私は、彼と別れたあと、万知子とふたりで、帰路につきながら、彼

女にダメを押ししたのです。

「いいかい？ ただのボーイ・フレンドだよ。キスもいけないよ。時期がくるまでは、キレイなおつき合いでいるんだよ。約束を破ったら、おじさん、承知しないからね」

「ええ、いいわ」

「じゃ、ゲンマンしよう」

私と万知子は、小指と小指をじつとりとからませました。そのとき私は、不意に、私の小指で、万知子の小指をぎゅッ、とねじりあげたのです。

「いたっ」

万知子は、悲鳴をあげています。その目には、涙さえ浮かんでいます。

私も笑わないで、コワイ顔で、じつと万知子を見ました。

「いいかい。人生には、痛いことがあるということを、教訓として、知っておくんだよ。万知子はまだ、生まれてから、ほんとに痛いことをされたことはないだろう。だが、これからは、いろいろと、痛い目にあわなければならないんだよ。おとなになれば、たのしいこともあるかわりに、痛いこともあるんだ。いいね」

「うん」

と、万知子はうなずきました。

——これでいい——

私は、内心でニヤリとしました。

万知子は、彼のようにすばらしいボーイ・フレンドを紹介してもらったことで、すっかり私に服従する気配を見せているのです。

それから、私は、第二段の工作にかかりました。